ば、

世中の淺き瀨にのみ成ゆけば昨日のふちの花とこそみれ、とありければ、人々見て、限なくめであはれがりけれど、たがみさうしの衣たまへるとも、えしらざりけり、おとこどものいひける、

藤花色のあさくも見ゆる哉うつろひにけるなごり成べし、

〔日本紀略一醍醐〕延喜二年三月廿日、於飛香舍有藤花宴、

〔枕草子三〕木の花は

藤の花、衣、なひながく、色よくさきたるいとめでたし、

あてなるもの

藤の花

〔枕草子五〕めでたきもの

いろあひよく花ぶさながくさきたる藤の、松にかゝりたる、

〔榮花物語三十歌合〕三月つごもり方に、〇長元七年藤壺の藤の花、えもいはずおもしろく、へいにさきかかりて、みかは水をやり水にほりわけてながさせ給へるに、さきかゝりたるいとおかし、この花の宴せさせ給、〇中略大夫權大夫などものずむじ、歌うたひなどあそび給、女房、

むらさきの雲たちまがふふちのはないかにおらましいろもわかれず

夏にだにちぎりをかけぬ花ならばいかにかせまし春のくるゝを、女房殿上人などおほかれどとゞめつ、

〔本朝無題詩二植物〕賦紫藤　藤原在良

何物送春思更侵、紫藤花綻艶方深、齊桓欲誤朝衣色、漢后可疑雲蓋陰、蘭圃秋風遙結契、竹林夜雨未知音、多年樂道無成士、倦學空催射鵠心、